

## C. S. ルイス：キリスト教弁証の諸相

—〈傲慢〉の罪とファンダメンタリズム—

高橋 清隆

日本大学大学院総合社会情報研究科

### Aspects of C. S. Lewis as a Christian Apologist

— A Consideration on Sin of Pride and Fundamentalists —

TAKAHASHI Kiyotaka

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

C. S. Lewis, the author of *The Chronicles of Narnia*, is also well known as a Christian apologist. On the one hand, he criticized such trends as liberal theology and fundamentalists within the Church of England. On the other hand, he insisted in *Mere Christianity*, which is one of his best apologetic works that pride is “the greatest sin” of all.

The purpose of this paper is to verify the relationship between pride and fundamentalists which C. S. Lewis criticized

---

#### 1. はじめに

C.S.ルイス(Clive Staples Lewis,1898-1963)は『ナルニア国年代記物語』の作者であると同時にキリスト教弁証家としても知られている。

本稿の目的は、ルイスがその最も有名なキリスト教弁証の著作『キリスト教の精髓』の中で、「傲慢」を最大の罪としていることが、ファンダメンタリスト批判に通じるのではないかということを検証することにより、キリスト教弁証家としてのルイスの一面を明らかにすることである。

まず、ファンダメンタリズムについて提示しておくべきであろう。ファンダメンタリズムは事典によれば次のように定義される。

第一次世界大戦後、ことに米国で起こったプロテスタントの運動で伝統的キリスト教の教義、ことに聖書の字句の神聖性を尊重擁護しようとするもの<sup>1</sup>。

これを敷衍すれば、ファンダメンタリズムとは、聖書が直接に神の靈感を受けたものであるという信仰に立脚し、聖書記者たちが書き記した言葉は神の啓示により示されたもので、一字一句正確に書き写したものであり、したがって、そのまま受け入れるべきであるという考え方である。中には極端に走り「血を避けるように」<sup>2</sup>という聖書の言葉をそのまま受け取り輸血拒否をする自称キリスト派も存在する<sup>3</sup>。これに対し、ルイスは聖書を一字一句神の靈感を受けたものとしてではなく、文学形式にふさわしく読むように、つまり、神の啓示による聖なる書物は文学であると主張する<sup>4</sup>。この見解はファンダメンタリスト批判に直結すると言えよう。

一方、「傲慢」は、キリスト教の事典によれば次のように記されている。

---

<sup>2</sup> 使徒言行録 15 章 20 節。

<sup>3</sup> エホバの証人は聖書の言を文字通り受け取り、輸血を避ける。(使徒言行録 15:29。)

<sup>4</sup> C. S. ルイス著、西村徹訳『詩篇を考える』新教出版社、2008 第 2 版、p. 8、竹野一雄著『C. S. ルイスの世界 永遠の知恵と美』彩流社、1999、pp. 67-68。

---

<sup>1</sup> 小林珍雄編『キリスト教百科辞典』ヘンデル代理店エンデルレ書店 p. 1415。

謙遜に対立する悪徳で、あらゆる悪と罪との根源。理性にとって明白な神の秩序に反して自己の欲求を重んじること。七つの大罪の一つ<sup>5</sup>。

「あらゆる悪と罪の根源」ならば、「傲慢」は最大の罪になりうる根拠があると思われるし、ルイスもそのようなものとして捉えている<sup>6</sup>。しかし、なぜ、キリスト教において「傲慢」が最大の罪であると見なされるようになったのだろうか。聖書にそのことを示唆する記述があり、ルイスがそれを一字一句そのまま受け継いだのだろうか。

そこで、「傲慢」が大罪の一つと数えられるまでの歴史的背景を、旧約聖書、新約聖書、初期教父たちの「傲慢」観、ルイスの「傲慢」観の順で見ていくことにより、「傲慢」に関するルイスの考えがどのような意味でファンダメンタリスト批判となるのかを明らかにしていきたい。なお、本稿で用いる聖書の引用は特別な場合を除き日本聖書協会『聖書—新共同訳』に依拠する。

## 2. 旧約聖書に見る「傲慢」

広辞苑によると、「傲慢」とは「おごり高ぶって人をあなどること。見くだして礼を欠くこと」<sup>7</sup>と定義される。このことは「傲慢」が「高慢」、「高ぶる」という言葉と同義であることを示唆する。旧約聖書中には「傲慢」が46回、「高慢」が29回、「高ぶる」が20回使われている<sup>8</sup>。これらの言葉が、まず旧約聖書においてどのように用いられているのか見ていきたい。

箴言には次のように書かれている。

主の憎まれるものが六つある。心からいとわれるものが七つある。驕り高ぶる目、うそをつ

く舌、罪もない人の血を流す手、悪だくみを耕す心、悪事へと急いで走る足、欺いて発言する者、うそをつく証人、兄弟の間にいさかいを起こさせる者。（箴言6章16-19節）

ここでは「傲慢」を神に憎まれる第一番目のものとして捉えている。別の箇所では「つまずきに先立つのは高慢な霊」<sup>9</sup>とあり、「傲慢」な者は、自分自身を崩壊に導くと捉え<sup>10</sup>、また、他の箇所では「高慢は偶像崇拜に等しい」<sup>11</sup>と、「傲慢」を偶像崇拜と同一視している。

では、旧約聖書の神は「傲慢」な者をどのように扱ったのか。神を受け入れていた者とそうではない者では対応が違うのであろうか。たとえばモーセとともにエジプトから脱出したレビ人コラの場合、コラは神を信じていた。しかし、ねたみに駆られたコラは、反逆的な群衆を率いて、神の任命したモーセとアロンの権威に逆らった。その高慢な行為は、神による滅びという結果を招いた<sup>12</sup>。これに対して、神を信じていない者の例として、出エジプト記5章には高ぶるファラオのこについて書かれている。ファラオの「傲慢」の結果はイスラエルを追走中、紅海にファラオを含むエジプトの軍勢が飲み込まれてしまうというものだった。別の例として、ダニエル書にはバビロンの王ベルシャツアルがエルサレムの神殿から奪ってきた金銀の祭具を用いて酒を飲み、バビロンの神々を褒め称えたことが記されている。しかし突然、人の手先が現れて壁に文字が書かれた。その意味は、王の心が傲慢になったが故に、王国の王座から引き下ろされ、その尊厳は取り去られるというものだった。その予言通り、メディア-ペルシャの軍隊がバビロンを征服し、ベルシャツアルは殺

<sup>9</sup> 箴言16章18節。

<sup>10</sup> *Today's English Version* は箴言16章18節を 'Pride leads to destruction' と訳している。（『聖書』和英対照、日本聖書協会、1998、p.1241。）なお、C.S.ルイスは「傲慢」をプライド（誇り）と同一視している。（C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髄』新教出版社、p.192。）

<sup>11</sup> サムエル記上15章23節。

<sup>12</sup> 民数記16章1-35節、26章10節。

<sup>5</sup> 小林珍雄編『キリスト教百科辞典』ヘンデル代理店エンデルレ書店、1960、p.602。

<sup>6</sup> C.S.ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髄』新教出版社、p.192。

<sup>7</sup> 広辞苑 第六版、岩波書店、2008。

<sup>8</sup> 日本聖書協会 website の検索機能による。

[http://www.bible.or.jp/vers\\_search/vers\\_search.cgi](http://www.bible.or.jp/vers_search/vers_search.cgi)  
(2013/05/10)

された<sup>13</sup>。これらの話の共通点は、神に対しての「傲慢」である。他の例を挙げれば、巨人ゴリアテ<sup>14</sup>、ペルシャの首相ハマン<sup>15</sup>なども同様の結果を見ている。

これらのことから、次のように言えるであろう。

- (1) 箴言は「傲慢」を神の憎まれるものの第一番目としてあげている。
- (2) 民数記は、神を受け入れていたコラはねたみにより「傲慢」になったとしている。
- (3) 箴言は、「傲慢」な者は、自分自身を破滅に導くとする。
- (4) 「傲慢」は偶像崇拜と見なされている。

つまり、旧約聖書の神は、神を受け入れていようがいまいが神に対する反逆は「傲慢」であり、神は「傲慢」な者を滅びに至らせる。なお、上記の(1)～(3)から「傲慢」が最大の罪であることを推測させる手がかりを得るが、旧約聖書から明確にそのように結論づけることはできない。

### 3. 新約聖書に見る「傲慢」

新約聖書(日本聖書協会「聖書」新共同訳)には「傲慢」が2回、「高慢」が9回、「高ぶる」が6回使われている<sup>16</sup>。まず、イエスが「傲慢」という言葉をどのように使ったのか、見てみたい。

中から、つまり人間の心から、悪い思いが出て来るからである。みだらな行い、盗み、殺意、姦淫、貪欲、悪意、詐欺、好色、ねたみ、悪口、

<sup>13</sup> ダニエル書5章1-31節。

<sup>14</sup> イスラエルの神を嘲弄する。その結果、ダビデにより死に至る。(サムエル記上17章23-51節。)

<sup>15</sup> モルデカイがハマンに対して平伏(崇拜行為に等しい)しなかった時、モルデカイを亡き者にしようとした。しかし、ハマンは柱に吊るされ死に至る。(エステル記3章5,6節、7章10節。)ハマンは傲慢になり自分が神だけに与えられる崇拜行為を求めた結果、死に至ったと推測できる。

<sup>16</sup> 日本聖書協会 website の検索機能による。  
[http://www.bible.or.jp/vers\\_search/vers\\_search.cgi](http://www.bible.or.jp/vers_search/vers_search.cgi)  
(2013/05/10)

傲慢、無分別など、これらの悪はみな中から出て来て、人を汚すのである。(マルコによる福音書7章19-22節)

この箇所背景には食事の際に手を洗うというユダヤ人の伝統があった。イエスはそれを批判した。イエスは、手を洗わないという行為とイエスがこの箇所です語った諸悪とを対比させている。そして「これらの悪が人を汚す」と言い、「傲慢」とその他の悪を同列に置いた。ただし、イエスのこの言葉から、「傲慢」を最大の悪であるかどうかを特定するのは困難である。

つぎに、使徒パウロの「傲慢」に関する見解は以下に見てとれる。

あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、ねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、人をそしり、神を憎み、人を侮り、高慢であり、大言を吐き、悪事をたくらみ、親に逆らい、無知、不誠実、無情、無慈悲です。彼らは、このようなことを行う者が死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています。(ローマ信徒への手紙1章29-32節)

ここでパウロは高慢を死に値するものとして書いているが、「このようなことを行う者が死に値する」と、高慢をその他の悪徳と同列に置いている。

ところで、新約聖書の中で最大の罪とされていると思われるものは「金銭の欲」である<sup>17</sup>。「金銭の欲」と訳されているギリシア語は *φιλαργυρία* であり、字義どおりには *love of money, avarice* (金銭の愛、貪欲) である。しかし、金銭そのものは悪くはない。旧約聖書の伝道の書には「金銭が身を守る」<sup>18</sup>とあるように、良い物としても捉えられている。しかし、金に対する愛が神になる時に、邪悪なものになる。

<sup>17</sup> テモテへの手紙一6章10節。

<sup>18</sup> 伝道の書7章12節。日本聖書協会口語訳聖書による。(口語訳の表記に倣う。)

新約聖書は金銭に対する欲を偶像崇拜と結びつける。

すべてみだらな者、汚れた者、また貪欲な者、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません。このことをよくわきまえなさい。(エフェソ信徒への手紙 5 章 5 節)

ここで、貪欲な者は偶像礼拝者と同等とされる。コロサイ 3 章 5 節でも、貪欲は偶像礼拝にほかならないと書かれている。キリスト教では偶像礼拝を「大罪の中でも最大なもの」<sup>19</sup>とする。パウロも次のように語る。

肉の業は明らかです。それは、姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ、泥酔、酒宴、その他このたぐいのもです。以前言っておいたように、ここでも前もって言いますが、このようなことを行う者は、神の国を受け継ぐことはできません。(ガラテヤ信徒への手紙 5 章 19-21 節)

ここで、偶像礼拝が他の悪徳と同列であると記し、神の国を受け継げない者とする。

以上の考察の結果、次のことが考えられる。

- (1) イエスは「傲慢」を罪として捉えているが、罪の格付けは行っていない。
- (2) パウロは「傲慢」を死に値する罪として扱っているが、他の罪（偶像礼拝を含む）と同列に置く。
- (3) 新約聖書は「金銭の欲」をすべての悪の根とする。
- (4) 「金銭の欲」、つまり貪欲を偶像礼拝と結びつける。
- (5) パウロの「肉の業」の中には「傲慢」はな

い。「傲慢」は「霊的」罪である。

これらのことから新約聖書の中では偶像礼拝を最大の罪と位置づけていると考えられる。旧約聖書の中で、「傲慢」を偶像崇拜として位置づけていたことは「傲慢」も最大の罪になり得ると捉えることもできるが、新約聖書は「傲慢」ではなく貪欲を偶像礼拝と結びつけている。したがって、新約聖書から「傲慢」を最大の罪であると確定することは困難である。つまり、旧新約聖書を通して言えることは、「傲慢」を罪として認めてはいるが、それを最大の罪と断定しているとは言えないのである。

#### 4. 初期教父の「傲慢」観

では、どのように「傲慢」が罪の中でも最大の罪として捉えられるようになったのか。それは、キリスト教には七つの大罪という考え方があり、そのことが起原であるように思われるのである。

キリスト教の正典の中には、七つの大罪についての直接的な言及はないが、その起原は、四世紀のエジプトの修道士エヴァグリオス・ポンティコス<sup>20</sup>の著作に八つの枢要罪として現れたことにある。エヴァグリオス・ポンティコスは「傲慢」を、「神を不公平なものとして提示する」とした。ただ彼はあらゆる想念の第一のものは「自己愛」に由来するし、それに続くのが八つの「想念」であるとし、「傲慢」を最大の罪とは見なしていない<sup>21</sup>。その後、罪の区分

<sup>20</sup> エヴァグリオス・ポンティコス (AD 354-399/400) 小アジア・ポントス州の小都市イボラで村主教の息子として誕生。カエサリアのバシレイオスによって誦経者、レジアンザスのグレゴリオスによって輔祭に叙任された。383 年頃、エジプトに移住し、修道集落ニトリアで隠修生活を開始。次いでケリアに移り、オリゲネス主義達と交友を結ぶ。死の直後、オリゲネス主義を排斥したテオフィロスとエジプト教会会議によって事実上断罪され (400)、ユスティニアス帝と第二コンスタンティノポリス公会議によって異端宣告を受けた。(553) (『東京大学宗教学年報. XXI』「資料翻訳と紹介：エヴァグリオス・ポンティコス『スケンマタ』」東京大学文学部宗教学研究室 2004. 3. 31、p. 167.)

<sup>21</sup> エヴァグリオス・ポンティコス『スケンマタ』

<sup>19</sup> 小林珍雄編『キリスト教百科辞典』ヘンデル代理店エンデルレ書店、1960、p. 519。

は、アウグスティヌス<sup>22</sup>によって、ついでグレゴリウス I 世によって明確に規定された<sup>23</sup>。それは「傲慢」、「貪欲」、「邪淫」、「嫉妬」、「貧食」、「憤怒」、「怠惰」の七つに分けられている<sup>24</sup>。そればかりか、罪の分類は、煉獄誕生のひとつの条件となった<sup>25</sup>。

ここで煉獄について述べておくべきであろう。

成聖の聖寵の内に死んだのであるが、小罪の償い、あるいは有限の罰をまだ完全にはたしていない最後の浄化の状態であり、至福直感にいたるため靈魂の浄化の状態である<sup>26</sup>。

では、どのような罪が煉獄で浄化可能なのだろうか。ダンテは『煉獄編』で「傲慢」を最大の罪として、最初に煉獄で浄めなければならない罪として描いた<sup>27</sup>。この煉獄の教理は神の慈悲が明らかにされていると言える。なぜならば、死者に対してまだ援助をする可能性があるという慰めが得られるからである。つまり、今、生きている者が死者の救済を神に祈り求める根拠を教理として与えているのである。

では、煉獄思想はどのように誕生したのだろうか。それはアウグスティヌスに端を発している。彼はその根拠をマカバイ二 (12:39-45) とマタイ (12:31, 32) に求めた<sup>28</sup>。しかし、アウグスティヌスは煉獄

思想の濃い『パウロの黙示録』を非難し、あくまでも死者の罪は代禱によって和らげられるとし代禱を奨励した<sup>29</sup>。つまり、アウグスティヌスにとって煉獄思想は確定したものではなかった。しかしグレゴリウス I 世はアウグスティヌスの煉獄思想を受け継ぎ、発展させた。このことは煉獄思想が初期教父により作り出されたことを示唆する。アウグスティヌスが煉獄思想の根拠になりうる理由を聖書外典のマカバイ二にも求めていることは、聖書外典であるが故に聖典として受け入れない多くのプロテスタントが煉獄思想を受け入れない理由になりうる。聖書の文字をそのまま受け入れるファンダメンタリストならばなおさら煉獄を否定するであろう。

このように見てきたところで言えることは、罪の分類はグレゴリウス I 世によって確定され、ダンテは「傲慢」を最大の罪として煉獄において浄化可能なものとした。煉獄思想はアウグスティヌスに端を発しグレゴリウス I 世に受け継がれた。ファンダメンタリストは煉獄を受け入れないことから、「傲慢」が煉獄において浄めが可能な罪であるという考えも受け入れないのである。

### 5. C. S. ルイスの「傲慢」観

さて、ルイスは、聖書や初期教父たちの「傲慢」観をどのように受け継いでいるのだろうか。ルイスは「傲慢」を最大の罪とするが、その理由は何であり、そのことがファンダメンタリスト批判とどのように関係するのだろうか。

ルイスは「キリスト教の教師たちの言うところによると、本質的な悪徳、究極的な悪は、傲慢である」<sup>30</sup>とし、「傲慢」観をキリスト教教師から受け継いでいると言う。特にアウグスティヌスの影響によることが『痛みの問題』の中で次のように述べられている。

(人間堕落) の罪をアウグスティヌスは人間の<誇り>の結果として描き出しています。誇

ヴィジュアル版、原書房、2001、pp. 56-57。

<sup>29</sup> 同上 p. 59。

<sup>30</sup> C. S. ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、p. 192。

東京大学文学部宗教学研究室 2004. 3. 31、pp. 167-177。

<sup>22</sup> アウグスティヌスは『神の国について』12・1の中で「傲慢は墮落の前段階にあるものではなくて、墮落そのものである」との見解を示している。(C. S. ルイス著、山形和美責任編集・監修、山形和美訳『C. S. ルイス著作集4』すぐ書房、1999、p. 428。)

<sup>23</sup> ジャック・ル・ゴッフ著、渡辺香根夫、内田洋訳『煉獄の誕生』法政大学出版局、1988、p. 9。

<sup>24</sup> 小林珍雄編『キリスト教百科辞典』ヘンデル代理店エンデルレ書店、1960、p. 658。

<sup>25</sup> ジャック・ル・ゴッフ著、渡辺香根夫、内田洋訳『煉獄の誕生』法政大学出版局、1988、p. 9。

<sup>26</sup> 小林珍雄編『キリスト教百科辞典』ヘンデル代理店エンデルレ書店、1960、p. 1886。

<sup>27</sup> ジャック・ル・ゴッフ著、渡辺香根夫、内田洋訳『煉獄の誕生』法政大学出版局、1988、p. 502。

<sup>28</sup> ジョルダナーノ・ベルティー著、竹山博英／柱本元彦訳『天国と地獄 天使・悪魔・幻視者の百科』

りとは、被造物（本質的に他者に依存し、その存在の原則をそれ自体のうちにはなく、他者のうちに持つもの）をそそのかして自分の力で立ち、自分自身のために存在しようとさせるものです<sup>31</sup>。

しかし、それだけにとどまらず、「傲慢」に関して独自の見解を展開する。そのことが同じ『痛みの問題』の中で述べられている。

被造物が神を神として認識し、自己として認識した瞬間から、彼は神と自己とどっちを中心とするかというゆゆしい二者択一を迫られる<sup>32</sup>。

つまり、〈誇り〉により人間は自己と神を比較し、どちらを取るか選択を日々せまられるとしているのである。さらにルイスは〈誇り〉がなぜ最大の罪になりうるかの理由について『キリスト教の精髓』の中で次のように言う。

プライドは本質的に——その本性そのもののゆえに——競争的であること、これに反して、他の諸悪は、いわば偶然的に競争的であるにすぎない<sup>33</sup>。

ここでルイスは「傲慢」は競争的であり、絶えず他と比較すること故に最大の罪であるとする。さらにルイスは具体的に論を進める。

貪欲のゆえに金を欲しが。しかし、それには限度がある。年収一万ポンドの男が二万ポンドを望むのは何のためか。それはより多くの快楽を求める貪欲からではない。一万ポンドあれ

ば、人が実際に享樂しうるあらゆる贅沢を手に入れることができるはずである。だから、それは貪欲ではなくプライドである。——権力への願望である。なぜなら、言うまでもなく、権力こそプライドが楽しんでやまぬものだからである<sup>34</sup>。

ルイスによれば貪欲や利己主義といった諸悪徳も「傲慢」に起因することになる。要するに、「傲慢」はすべての悪の根になり得るとのことなのである。

またルイスは「悪魔が悪魔になったのも高ぶりのゆえであった。」<sup>35</sup>とし、悪魔が悪魔になった原因を「傲慢」に帰す。ルイスは誤解を与えないために、（１）人にほめられて喜ぶのはプライドではないこと、（２）自分の父親、学校、所属連隊を自慢することは「傲慢」ではないこと、（３）神は人間のプライドが腹立たしいからそれを禁じているのではないこと（４）もし謙遜な人に出会っても今日的な意味での謙遜な人であると想像してはいけないことを挙げる。

これまで述べてきたとおり、ルイスが「傲慢」観を展開するにあたって、主に基礎としたのはキリスト教の教師、特に、アウグスティヌスの考えであった。ルイスが達した結論は「傲慢」は競争的であるが故に最大の罪であるというものだった。しかし、聖書の中には「傲慢」は罪ではあっても、最大の罪とは書かれていなかったことは前節で見た通りである。それに加え、ルイスは、悪魔が「傲慢」故に悪魔になったことを含めて、聖書の具体的な言葉を根拠として論を展開していない。これらのことは、ルイスが聖書の言葉を一字一句受け入れるファンダメンタリストの考え方と大きく違うことを示していると言えるであろう。

## 6. 煉獄と偶像礼拝に対するルイスの見解

既述したとおり、初期教父は罪を煉獄と結びつけている。では、ルイスは煉獄に対してどのような意

<sup>31</sup> C. S. ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』一改訂新版、新教出版社、2012、p. 92。ここでルイスはアウグスティヌス著『神の国』第14巻13章を根拠として語っている。

<sup>32</sup> C. S. ルイス著、中村妙子訳『痛みの問題』一改訂新版、新教出版社、2012、pp. 92-93。

<sup>33</sup> C. S. ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009新装版、p. 193。

<sup>34</sup> 同上 p. 194。

<sup>35</sup> C. S. ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009新装版、p. 192。

見を持っていたのか。

ルイスはダンテの『煉獄編』を愛読していた<sup>36</sup>。ルイスは『神と人間の対話』の中で、トマス・モアやジョン・フィッシャーなど、十六世紀の殉教者たちによる煉獄に関する教えを仮地獄、単なる懲罰の場所、と批判したあと、次のように述べる。

正しい煉獄観はニューマンの『夢』において壮大に復帰します。わたしの記憶が正しければ、失われた魂が神の御座のふもとで、そこから運び去られること、浄化されることを哀願します。その魂は、「御座の光を己の闇で汚辱すること」に瞬時も耐えらぬからです。宗教は煉獄を取り戻したのです<sup>37</sup>。

ルイスは英国国教会信徒であるにもかかわらず煉獄を肯定する<sup>38</sup>。ルイスがこのように煉獄が浄めの場所であり、地獄が懲罰の場所であると認識していたことは、死者は煉獄において意識あるものであることを意味するのだろうか。そのことを理解する手がかりは、ルイスが死者に対して祈ることを肯定するかどうかにあると思われる。そのことについて、ルイスは『神と人間の対話』の中で「無論、わたしは死者のために祈ります」と述べ、次のように続けている。

わたしたちの年齢では、最愛の友の大部分が他界しています。もしも私の最愛のものを神に向かって口に出せないとすれば、一体どのようなたぐいの神との関係を、わたしは持つことができるのでしょうか<sup>39</sup>。

ここでルイスは死者に対する祈りの正当性を主

張することにより、死者が煉獄で意識あるものとして存在していることを提示する。では、ルイスはどのように死者が意識あるものとして煉獄で罪を浄化しているのだろうか。焼け付くような火での浄化であろうか。『神と人間の対話』で次のように言う。

煉獄に関する私の好きなイメージは、歯科医の座席に腰かけている状況に由来するものです。歯が引き抜かれ、徐々に「意識を回復する」時に、「これで口の中をゆすぎなさい」という声がします。これが煉獄なのでしょう。このすすぎは、想像する以上に長くかかるかも知れません。この味わいは、現在の感覚では耐えきれぬほど激痛で苛酷なものであるかも知れません。ところが、モアやフィッシャーは、それが胸のむかつくようないとわしいことであるといっていますが、そういう風にわたしは納得いたしかねます<sup>40</sup>。

ルイスは煉獄を、まるで歯が悪い患者が、より良い状態を得るため、痛い治療を通して歯科医によって治癒され、治療のため血で汚れた口内を水ですすいで清潔にするがごとく、死者をより良い状態へとするため、死者の罪を洗う浄めの場所として理解しているのである。煉獄は死者の罪を浄化し地上の楽園から天国へと至る過程としても捉えられる<sup>41</sup>。もしそうであれば、ルイスは煉獄に一種の「憧れ」に至る道を見ていたのかもしれない。

ところで、ルイスは、煉獄で浄められる「傲慢」について、どのように考えていたのだろうか。ルイスは「傲慢」という罪の重さについて『キリスト教の精髓』の中で次のように述べる。

他の、それほど悪質でない悪徳は、悪魔がわれわれの性獣を通してわれわれに働きかけてく

<sup>36</sup> ウォルター・フーパー著、山形和美監修『C. S. ルイス文学案内辞典』彩流社、1998、p. 300。

<sup>37</sup> C. S. ルイス著、竹野一雄訳『神と人間の対話』新教出版、2006、新装第2刷、p. 175。

<sup>38</sup> 聖公会大綱 39 箇条第 22 条は煉獄を認めていない。

<sup>39</sup> C. S. ルイス著、竹野一雄訳『神と人間の対話』新教出版、2006、新装第2刷、p. 173。

<sup>40</sup> C. S. ルイス著、竹野一雄訳『神と人間の対話』新教出版、2006、新装第2刷、p. 176。

<sup>41</sup> ジョルダナーノ・ベルティエー著、竹山博英／柱本元彦訳『天国と地獄 天使・悪魔・幻視者の百科』ヴィジュアル版、原書房、2001、pp. 63-65。

るところからくる。だが、高慢はわれわれの性獣を通してくるのではない。それは地獄から直接来るのである。それは純粹に靈的なものであり、したがって、はるかに陰微かつ致命的である<sup>42</sup>。

既述した煉獄の説明においては、煉獄で浄められるのは小罪であったが、それに対し、ルイスは「傲慢」は直接地獄から来る大罪として分類する。このことはダンテが「傲慢」を最大の罪としてみていたことと一致する。ダンテはそれを煉獄で浄化可能なものと見た。

偶像礼拝については、旧約聖書が「傲慢」を偶像崇拜と、新約聖書が食欲を偶像礼拝と結びつけ、偶像礼拝を罪の中でも最も重いものとしているのに対し、ルイスは、食欲は限度があるものとして捉え、その限度を打ち破るものとしてプライドを挙げる。ルイスの考えからすれば、偶像礼拝を「傲慢」より重い罪と見做すことは困難である。ではルイスは偶像礼拝をどのように位置づけているのだろうか。ルイスは偶像化された神々を拝するギリシア神話を含め、異教の神話を肯定しているが、このことは偶像礼拝をある程度容認することに繋がるのだろうか。また、このことはファンダメンタリスト批判とどのように関係するのだろうか。神話を受け入れていた理由について、ルイスは次のように言う。

異教の物語はすべて、年毎に、あるいは誰もその時と場所を知らないにしても、死んで甦る誰かに関する物語である。キリスト教の物語は歴史的人物に関するもので、彼の処刑はかなり正確に時期を定めることができる。それは虚偽と真理の違いではない。現実が起こった出来事と、その出来事のおぼろげな夢、あるいは予感との違いである。それは何か少しずつ焦点を結ぶのに似ている。それは初めの段階では神話と秘儀の暗雲のなかに漂い、途方もなく漠然としている。やがてそれは凝結し、固まり、ある意

味で小さくなって、一世紀のパレスチナの歴史的出来事となる。あらゆる事柄の本質的意味は神話という<天>から歴史という<地上>に下ってくる。そのようにして、部分的にその栄光が失われたのは、キリストがご自身の栄光を空しくして人となられたのと同じである<sup>43</sup>。

ここでルイスは、死んで甦る異教の神々の神話をイエス・キリストの予兆と考えている<sup>44</sup>。そのように聖書を読むことは一字一句聖書を読むのではなくキリストの受肉、死、昇天という聖書の大切なメッセージに目を向けた結果であろう。この点もルイスが聖書の言葉を文字通り受け入れるファンダメンタリストと意見を異にするところであろう。しかし、ルイスは異教の神話をすべて容認してはいない<sup>45</sup>。キリスト教徒として偶像崇拜は当然否定する。

## 7. 終わりに

ここまで聖書や、初期教父の「傲慢」に関する見解を通して、なぜルイスが「傲慢」を最大の罪であるとしたのかを見てきた。旧約聖書では、「神に対する傲慢」が滅びに値するものであるのに対し、ルイスは「傲慢」そのものが何よりも競争的であるので最大の罪であるとした。それに至る背景には、聖書よりも初期教父の教え、特に煉獄思想に影響を受けたことがあった。そして何よりもルイス自身が聖書を文学として読んでいたことに起因しているように思われる。ルイスはそのことについて『詩篇を考える』の中で、聖書のさまざまな部分を異なった種類の文学として読むようにと述べているが、そのことは、聖書の重要な内容に心を向けて読むように勧め

<sup>43</sup> ウォルター・フーパー著、山形和美監修『C. S. ルイス文学案内辞典』彩流社、1998、p. 443。

<sup>44</sup> ルイスは『奇跡論』(1947)の中で「神が人として受肉するようになるのとちょうど同じように、記録の面において、真理は最初<神話的な>形で現れ」と書き記している。(ウォルター・フーパー著、山形和美監修『C. S. ルイス文学案内事典』彩流社、1998、p. 443)

<sup>45</sup> ウォルター・フーパー著、山形和美監修『C. S. ルイス文学案内辞典』彩流社、1998、p. 443。

<sup>42</sup> C. S. ルイス著、柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社、2009新装版、p. 197。



ていることであり、このことがファンダメンタリスト批判へと通じるものと思われる<sup>46</sup>。煉獄思想は神の慈悲の表れであった。そのように初期教父たちは聖書から読み取った。その煉獄思想を作り上げた初期教父の煉獄を通しての「傲慢」に関する意見をルイスは受け継いだ。このことは聖書を文学として見ないファンダメンタリストとに対してルイスが意見を異にしていることの原因になると思われる。

(Received: May 31, 2013)

(Issued in internet Edition: July 1, 2013)

---

<sup>46</sup> C. S. ルイス著、西村徹訳『詩篇を考える』新教出版社、2008 第 2 版、p. 8。